

(様式2) 令和1年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名
4	川崎市立橋高等学校 全日制
校長名	吉田 宏

学校教育目標	学校経営の目標	今年度の重点目標
真理と正義とを愛し互いに敬愛の誠を尽くし、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身共に健康な平和国家社会の形成者の育成 1知性と品性を高め豊かな情操の育成に努める 2協同愛友 3自治の精神の確立 4勤労愛好の習慣の体得	1 課題解決力を育てる教科指導 2 進路を見ずえた特別活動等の指導 3 豊かな心で社会貢献できる人材の育成 4 魅力ある学校づくり	・基礎・基本の定着や応用力・課題解決力及び自己学習力の育成 ・個々の進路を考えた進路指導・生徒指導・総合的な探究の時間・特別活動指導の充実及び生徒の主体性の育成 ・人権尊重教育・道徳教育・共生教育、健康・安全教育・ESDによる豊かな心とコミュニケーション能力の育成 ・開かれた、信頼される学校づくりと活力あふれる教職員組織の構築

評価項目	具体的な取組	実現状況及び課題	具体的な改善策
1 教育課程 学習指導	自己学習力を強化を目指し、日常生活で家庭学習を身につけさせるために課題を出したり、学習環境を整えたりして、自学自習の習慣を身につけさせるように努力する。さらに、自ら問題解決力を身に付けられるよう、また個々の思考を表現できるよう授業に工夫を凝らす。そのため、言語活動やアクティブラーニング、ESDによる学習活動等を積極的に授業に取り入れる。更にユネスコスクール参加の取組みも目指す。	学校評価アンケートの結果から、個々の生徒に対する理解力に応じた教科指導について、教師側と、生徒側の考えとに大きな差が見られる。また、家庭学習が不十分であると考える生徒が多い。早朝や昼休み・放課後などの補習や定期考査前に自習を進められる環境を整えることが急務であると思われる。また、新学習指導要領や大学共通テストへ準備の研鑽をさらに深めると同時に、基礎・基本の定着に基づく応用力や問題解決力、自己学習力の育成に努めていく必要があると思われる。	新学習指導要領が示され、高大接続計画に向けた新しいカリキュラム編成の検討が急務になっており、新カリキュラム推進委員会を立ち上げ、新カリキュラム、それに伴う時間割・時程変更について検討中である。また家庭学習の不足を補うため、宿題や補習課題を課し、自己学習の習慣化をサポートしていく必要がある。その為各学年とも、朝学習(自習)に力を入れている。これからは、学習委員会などを有効に使い、全校で共通して取り組む体制を整えたい。またユネスコスクール参加により本校の特色を更に打ち出す必要がある。
2 進路指導	各学年に応じた段階的な進路指導を実践している。3年間を見通した進路計画に立脚し、生徒の進路希望実現のサポートを行っている。また、選択制カリキュラムに対応したキャリア教育や、外部講師による講演、大学見学などを実施するとともに、保護者へ最新の情報提供にも努めている。	学年や普通科、国際科、スポーツ科といった生徒の状況に合わせた進路指導や情報提供を行うことで、生徒一人ひとりの進路意識を高めることができた。また、大学見学・大学模擬授業なども実施し進路実現に向けて多方向から支援できた。JAPAN-eポートフォリオが導入され、生徒が不利な状況にならないよう対策が急がれる。生徒の進路実現のために、最新の情報を集め対策を立てることが今後の課題である。	思考力、キャリア・プランニング能力の向上に向けて、より多くの体験的な学習や外部講師の活用を工夫していく。生徒に職業意識や人生観を涵養するために一層学級担任と家庭との連携協力を目指す。進路指導部は進路指導の充実を図り、各学年・各部署に最新の情報を提供し共有することを今後も継続していきたい。
3 生徒指導	「安全で安心して学べる環境づくり」を最優先に規則の遵守と主体的な活動を図る取り組みで、生活面や身だしなみなど基本的生活習慣の習得を図り、指導を行う。また、互いを認め合い、尊重しあひながら学校生活が送れよう指導していく。教育相談面での取り組みを学校カウンセラーや外部専門機関との連携をより一層充実させ、一人ひとりに対してきめ細やかな対応ができるようにする。	学校生活を通して主体的に行動できる生徒は多くないと感じる。今後も様々な投げかけを生徒にしていき、自ら考え、行動できるように促していきたい。また、いじめの問題や生徒間のトラブル、心の悩みなどに対して、適宜アンケート調査を行い、生徒の行動を常にチェックするとともに、担任の先生や保健室と連携を取り、生徒たちの様子や声をいち早く察知できる体制をとっていきたい。	教員間の共通理解を図り、連携をより深めることが重要である。教育相談やアンケート調査、面談など日常生活の中で様々な教員が関わりながら解決できるよう、よりきめ細かい環境づくりが大切であると考えられる。また、生徒が主体的に活動できるように、部活動や学校行事などに自ら積極的に参加できる指導を継続していくことが重要であると考えられる。
4 生徒会指導	橋花祭(歌合戦・体育祭・文化祭)を中心とする各生徒会行事(対面式・部活動紹介・生徒総会・三送会)の企画・運営及び、日常的な組織運営(代議員会・各種委員会・部活動・社行会・全国高等学校野球選手権や春の高校バレーの応援 等)を、分掌・学年と連携し、生徒が主体的に取り組めるよう支援していく。また、保護者や地域等とも連携し、環境整備と指導を行う。	今年度の橋花祭テーマは「黎明」で、令和という新しい時代の始まりに様々なことに挑戦しようという意味が込められていて、昨年度以上の内容となるよう工夫された内容であった。この実行委員会にも、委員会の中心となる企画部を設置し、昨年度の課題を解決するための改善策を打ち出すとともに、今年ならではの新しい企画を立てていた。各行事には、実行委員だけでなく、多くの生徒が主体的に取り組んだ。課題としては、夏の暑い時期に行う行事もあるので、生徒の健康管理に、より気をつけながら、運営することや、多くの活動がおこなわれる本校において、日程の調整が必要である。	学校行事の歌合戦が7月中旬に本校の体育館で行われるが、暑い時期であるので、今年度は冷風機をレンタルし、生徒の健康管理に努めた。生徒1人ひとりの暑さ対策や、体育館の環境整備、タイムスケジュールの工夫等を行って、非常に白熱する行事を、生徒の健康管理に十分配慮しながら、今後も行っていきたくと考えている。また三送会の日程を今年度は2月中旬から卒業式前日に変更した。2月中旬だと進路活動などで参加できない3年生も多く、今後も生徒の活動が確保できるように努めていきたい。
5 部活動指導	各部ともに、基本的な技術の定着を図ることはもちろん、肉体的にも精神的にも健康や安全に配慮する。そして、それぞれの目標に合わせた活動ができるように練習計画を立てて行う。指導方針において、助言を丁寧におこない生徒に寄り添う指導を目指す。また、基本的生活習慣を定着させ、さらに挨拶や礼儀、活動場所の清掃などの指導を丁寧に行い、部活動の成果が日常生活においてもその行動や言動に反映されるような指導をする。	今年度の部活動指導方針としてたて、「助言を丁寧におこない生徒に寄り添う指導」を実践し、運動部、文化部ともに部活動が活発に行われ、全国大会等で多くの結果を残している。技術的に向上し、日々の努力が実績となって表れる部が多い。また、基本的生活習慣や挨拶、礼儀、活動場所の清掃などが、学校生活に留まらず、毎日の生活の中でも発揮できている。また、学習面では、部活動とのバランスがうまく取れず、ストレスとなる生徒も存在するため、時間の使い方の工夫など継続して支援していくことが大切である。	指導において助言を丁寧におこない寄り添う指導によって充実して部活動での活動となった。学校生活における学習・部活動・行事のバランスを上手に取り、前向きに充実した毎日が過ごせるよう、指導・支援を丁寧に行っていく。また、部活動の時間が有意義で成長につながるようにするため、地域や保護者との連携を密にし、協力していくことも今まで以上に必要と考える。毎日の活動の中で指導・支援の仕方を考え、練習計画や練習内容を工夫することがさらに必要であると考えられる。
6 健康安全指導	本校の健康安全面の課題を踏まえ、学校保健安全計画を立案し現状の改善、向上を図る。全体に「薬物乱用防止教育」を実施、またスポーツ科と運動部を対象に「けが防止講演会」を実施し正しい知識の習得と実践に繋げる。1学年を対象に「交通安全講習会」「性教育講演会」を実施し、高校生として自らが考え健康で安全な生活を送れる力を体得できるよう努める。また教職員を対象に医師、看護師を講師に迎え、「心肺蘇生法」「食物アレルギー対応研修」を実施し、職員の共通理解を図るとともに緊急時の校内体制を整えることで生徒が安心して学校生活を送ることができるようにする。	年度当初に交通安全講演会を取り入れ、次にけが防止講演会、性教育講演会を実施することで系統的に生徒の健康安全に対する意識を高めることが出来た。職員間では生徒の個々の健康課題の周知と対策について共通理解を図り、充実した連携が出来るような研修を実施できた。一方、けが、疾病への対策への取り組みはしてきたものの生徒のメンタルヘルスに関しては不十分である。今後も多様化・複雑化する健康課題を抱える生徒が増えつつあるので、より充実した支援のできる校内体制が必要である。	生徒の精神面、健康面での支援が養護教諭、スクールカウンセラー、担任に留まっていることも否めないため、分掌、学校全体の組織として対応していく体制を充実させることが必要である。また専門的な指導が必要であれば外部機関と連携し、生徒へよりよい支援ができるようにしていきたい。今後も職員研修の充実、生徒のニーズに合わせた講演会などの企画実施を図り、生徒が安全、安心に学校生活が送れるように取り組んでいきたい。
7 国際理解教育	国際理解教育を通して、世界が抱える諸問題について生徒自らが問題意識を持ってアプローチできるように指導していく。将来的に世界に貢献できる人材になれるように様々な機会を提供する。国際協力機関(JICA・WFP・UNICEFなど)への訪問、高大連携による途上国理解プログラム、国際的な舞台上で活躍している講師を招いての国際理解講演会、多文化共生を理解するためのワークショップ等を実施していく。また、2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピックを、生徒たちが幅広い分野に視野を広げる絶好の機会と捉え、多文化共生社会について学び、国際社会の一員としての日本人という意識を培っていく。特にパラリンピックに関しては、障害や障害者への理解を深め、真の共生社会実現のためにどのような取り組みが必要であるかを考察していく。	開発教育における体験型ワークショップや多文化共生プログラムに参加し、生徒たちは世界が抱える諸問題に目を向けることができるようになった。今年度は国際理解教育の一つのキーワードをSDGs(持続可能な開発目標)とし、生徒自らが課題を設定し、その課題を解決するための実践方法を考察し、その学習の成果を授業(国際理解・課題研究)や総合探究の時間にプレゼンテーションという形で発表してきた。高校生としてはかなり高い次元での学習活動が実施された。国際理解講演会では、長野パラリンピックの金メダリストで国際パラリンピック委員の方を講師として招き、パラリンピックや共生社会についての話を伺い、生徒たちの障害や障害者に対する理解が深まった。	今年度も国際理解教育において様々な活動を実施してきた。生徒たちは自主的に課題を見つけ、グループやクラスなど共同で問題に取り組む姿勢も身につけてきた。また、プレゼンテーションを通して自らの考えを発信する力も鍛えられている。今後もこの主体的・対話的で深い学びを継続していく必要がある。行事全般に関して言えば、やや供給過多になっている感がある。また、マンネリ化しつつある活動もあるので、行事全般の見直しをする時期に来ているような気がする。生徒たちにとって何が一番必要なのかを精査し、最も効果的な活動を行っていくことが大事である。更に、過去の実践に左右されることなく、大胆な変更や改善も視野に入れておかなければならない。
8 スポーツ交流	高大連携事業の一環として、メディカルチェックを国際武道大学の協力の下、1年生・2年生で実施する。また、スポーツ総合演習のスポーツリーダー企画運営の一環として、小学校3校と「新体力テストテスター」を企画・運営・サポートの形で参加する。体育祭においては、実技発表に玉川中学校2年生を招き参観をする機会を設ける。さらに等々力アリーナで行なわれる「手をつなぐフェスティバル」に2年生スポーツ科が参加し、障害者、ボランティア、地域の方々とのスポーツ交流を行う。	様々な交流の機会が多く設定されており、どの交流に対しても生徒たちは積極的に取り組んでいる。中でも、スポーツリーダーを目指した中で、企画力の向上・運営方法の学習、精神面での成長など多くのことを身につけることができたと思われる。課題としては、多くの時間を要するこれらの企画・実施の中で、「自分の時間の使い方」「実践力」「進化・発展させる応用力」をさらに身につけ、発展させることが課題となる。	現在の状況では、交流の場を増やしていくことは、難しいと思われる。これらの活動の目的と専門学科の科目との位置付けを明確にし、実施内容の検討や、体系化をしっかり和組み立て、さらなる充実を図っていきたい。また、指導者側の授業の内容の精選、生徒自らの時間の確保、企画段階での工夫などに積極的に取り組んでいきたい。
9 組織運営	各校務分掌や委員会、教科からの要望や問題提起に対して、運営委員会内で検討を進め、当該部署に解決策を諮問し、また新委員会を設立して個々の事案への対応を行っている。定期的開催される職員会議において、全職員で情報を共有し、協調して諸問題の解決を図っている。生徒指導等に関わる内容については、臨機応変に臨時職員会議を招集し、生徒の学校生活をサポートできる体制を整えている。	次期学習指導要領に基づく新カリキュラムに関しては、教育課程検討委員会からの要望を受けて、昨年設立した教育課程編成方針策定委員会にて、カリキュラムの枠組を取りまとめることができた。現在はそれを受けてカリキュラムの中身や実質的な運用を関係部署に促している。担任・分掌調整については、現在行っている試行的な調整方法で一定の改善がみられた。しかし、十分ではない部分も見受けられるので、さらに議論を深めていく必要がある。	昨年、個々の分掌や委員会では対応できない懸案が増えてきている。現在は分掌横断的な新委員会を設立して対応を行っているが、将来的には分掌の再編、人数調整等も必要となってくるであろう。また、学校の将来像を見据えた上で、学校全体を把握し調整できるような、統合的な組織も必要ではないかと考えている。
10 開かれた学校づくり	学校行事・生徒会行事・PTA活動への参加者が高止まりしている状況を受けて、校内担当者間での連携を密にし、学校教育活動を円滑に執り行っていく。地域・保護者・学校の3者が一体となり、充実した学校生活の構築に努める。地域からの意見や要望を集約し、PTA活動もより効率化していく。授業や学校行事等を常時公開し、生徒の活動をより多くの方に知ってもらおう。また、地域や保護者との情報交換・意見交換の場を多く設定し、学校教育活動への理解を深めていく。	地域・保護者の理解と協力のお陰で、今年度も学校教育活動を円滑に行うことができた。参加者増加の傾向にある行事に関しては、PTAの意見を参考にし、よりスムーズな運営をすることができた。また、PTA活動の一環である懇談会については、保護者と各学年との直接連絡を基本として設定したが、学年やクラスの間で若干意思疎通がうまくいかない場面も見受けられた。また、地域や保護者からの様々な意見や要望は教員間で共有し、学校内での議論を促進した。特に保護者からの要望が多かった防犯カメラの設置が実現でき、生徒の安全な学校生活づくりに繋ぐことができた。	相変わらず学校からの情報が家庭に届かないというケースを数多く耳にする。生徒への指導を徹底し、家庭への啓発活動も引き続き実施していく必要がある。情報発信の手段も今後検討していく必要があるかもしれない。学級懇談会については、これからも保護者と学年・担任との直接情報交換を基本とし、より有意義な会になるよう努めていきたい。

学校関係者の評価	今年度のまとめ・次年度へ向けての取組
<ul style="list-style-type: none"> ・部活動や行事が積極的でいい。これからも支援していきたい。 ・部活に追われつつも、塾にも行かず友達と支え合いながら結果を出す。その結果が学校評価にも出ている。道でも立ち止まって挨拶していく。 ・アンケートの学校全体の評価が100%になるよう頑張ってもらいたい。 ・学校目標の「中期計画」や「重点目標」などが、「自己評価報告書」とリンクするといいいのでは。 ・地域として、豊かな心で社会貢献ができる人材の育成をお願いしたい。 ・大学入試改革のどこに力を入れていくべきか。やはり、コミュニケーション能力や課題解決力を入れてほしい。 ・グローバル人材の育成という点でも、国際科が目目されている。どのように力を入れていくべきか。 ・18歳選挙権対策について、どのようなことを中心に指導していくべきか。 ・入学、卒業して本当に良かったと思う生徒が多い。今後とも開かれた学校活動に取り組んでほしい。 ・総合的な探究の時間についても、どのようなものか聞きたい。 ・不易流行ということもあるが、もちろん、最新のものも大事だが橋高校が今まで積み重ねたものも大切に。限られた時間の中で取捨選択し進めてほしい。探究の時間についても次年度には実践を示してほしい。また、前出のように自己評価のリンクの明確さが必要と考える。 	<p>今年度の自己評価の方法も昨年度と同様にした。具体的にはここ数年間の変容を見るためにも、まず生徒・保護者の評価を先に行い、その結果を全教員で確認した上で教員の自己評価を行うことが必要と判断した。自己評価のやり方も昨年と同様に行った。教員の自己評価においては、学習面と進路(選択科目)の項目では大きな変化はなかったが、現状での問題点を認識し、今後検討し、新学習指導要領編成に向けて、具体的に取り組んでいく必要がある。学習面では、アクティブラーニングの授業を導入することによって、授業の有り様も大きく変化した。その定着度を確実にすることも必要である。この点も踏まえ、生徒の理解力不足の原因がどこにあるのかを明らかにする取り組みが必要であると考えられる。家庭学習に関しては、引き続きできていないという回答が多い。さらに、生徒本人が自主的に家庭学習へ取り組むためのアプローチも必要であると考えられる。1年生からおそらく大学入試に取られるであろう「eポートフォリオ」でも、生徒各自が取り組んだ内容について振り返る必要性が出てきており、日頃の家庭学習の重要性について、今後も根気よく指導していく必要がある。その点、大学入試における民間等が実施する資格・検定試験の活用を見据え、資格取得を奨励した結果、3年生だけでなく2年生においても英語の資格取得者が大幅に増加した。キャリア教育についても、昨年度から新たな取り組みを始めた。今年度も平日に学校として1年生全体で大学訪問を今年も実施した。生徒や保護者からは、卒業後の進路を考えていく上で良い契機となったという意見が多かった。また、昨年度からは、新しい学習指導要領の編成に向けた取り組みが為されており、各分掌や教科、学科からの代表で組織された委員会を軸に、カリキュラム委員会と協力し、時程の編成を踏まえた新しい体制作りに取り組んでいる。そのために、多方向からの情報収集と的確な情報分析を行い、その対応を強化していく必要がある。学校評価アンケートを総合的に判断すると、学校生活は落ち着き、生徒は自主的にそして意欲的に様々な活動に取り組んでいることがうかがえる。この活動を発展させるためにも、次の段階を目指していくことが肝要かと思われる。</p>